

# 大空 (生徒・保護者向け) 64号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和4年3月23日(水)

## さようなら恭子(3学期終業式)

### □本日の概要

- コロナウイルスに振り回される状況は今後も続くことが予想される。今こそ、主体的な態度が重要である。
- 私が担任をした恭子という生徒は、ひたむきな努力を続け、イギリスの大学に留学し英語を極めた。同時に、日本にいる両親のことを思いやる気持ちを忘れなかった。外資系企業に就職後も英語の専門家として独立する努力を続けた。
- 前向きな生き方は人を励まし続ける。皆さんの命を輝かせられるかどうかは、すべて君たちの意思と、努力にかかっている。ひたむきに、愚直に、全力で中学校、そして高校生活を送ってほしい。
- 本日のNFC 感性 行動力 自他肯定力 想像力

### □主体的に生きる

3学期の終業式を迎えることができました。この1年間も、新型コロナウイルスに振り回された1年でしたが、それでも昨年度より多くのことができたと思います。しかし、来年度も、恐らく、今年と似たような状況が続くでしょう。私が1年間繰り返し語ってきたことは、このような状況だからこそ、今まで以上に大切になるのは主体性だということです。自らが疑問を持ち、自分で探究し、自分で学ぶという姿勢がなければ、コロナで不安定な社会に振り回され、自分を見失ってしまうかもしれません。試練は終わりません。これからも続きます。それにくじけず、自らの人間性を高める努力をして欲しいと思います。

さて、今日は、私が皆さんに直接時間をとって話すことができる最後の機会です。私は、桜の季節になると必ず思い出す生徒がいます。今日は私の教師生活の中で最も心に残っている生徒の話をしてします。

### □恭子の生き方

恭子という生徒でした。私が都城泉ヶ丘高校で勤務していたときに出会った生徒です。昭和62年(1987年)、彼女が1年生の時、私は国語を教科担任として教えました。私は彼女の学年を持ち上がり、翌々年の平成元年(1989年)、彼女が3年生の時には担任になります。

恭子は、表面的にはおっとりとしていますが、実は芯の強い頑張り屋で、居るだけでクラスの雰囲気明るくなる、そんな子でした。本当に素直で、優しく思

いやりがあり、挨拶が良く、清掃熱心でした。そして、都城泉ヶ丘高校野球部のマネージャーとして選手たちの面倒を良く見ていました。

都城泉ヶ丘高校は、都城西高校と野球定期戦を行っています。ある時、都城西高校のキャッチャーだった選手が肩を壊し、練習できずに落ち込み、部活動にも行かなくなったことがありました。チームは違いますが、彼女は都城西高校の選手も、同じ都城地区の野球仲間だと考えていたのです。彼女は、「キャッチャーだけに拘らずに、できるポジション、できる練習から始めたら？」と故障した選手を励まし、その言葉をきっかけに、彼は野球部に復帰したことがあります。このように、彼女は、決して強い言葉を口にするわけではないが、それでいて一つの方向性を、いつもしっかりと指し示していました。目標に向かって、こつこつ努力する、それが恭子の生き方でした。

高校時代、彼女は「英語を学びたい」という明確な希望をもっていました。しかし、当時は高校生の人口のピークの頃でしたので、大学に入ることが大変難しい時代でした。特に、英語を学べる学科は人気があり、入学は簡単ではありませんでした。彼女は国立大学の英語科を志望し、本当に良く努力をしました。しかし、センター試験は失敗でした。目標の大学ではありませんでしたが、何事も前向きに考える彼女は、東京のある私立大学の英語科に進学し、希望いっぱいの学生生活を始めます。

彼女は、卒業後も私に良く手紙をくれました。携帯電話もスマホもない時代のことは想像できるでしょうか。彼女はバッグの中に常に絵はがきを忍ばせ、ちょっとした暇にもあちこちに葉書を出す習慣がありました。端正な文字の手紙を受け取る度、彼女の人柄と大学での楽しそうな様子が目に浮かぶようでした。

大学在学中も彼女は本当に一生懸命勉強したようです。それでも自分の学習に対しては納得できないものがあつたのでしょうか。もっともっと英語を本格的に勉強したい。海外に留学し、生きた英語を学びたい。彼女はそう思います。経済的に厳しい東京での学生生活でありながら、彼女は500円単位のささやかな貯金を始めます。その当時はバブル経済の時代です。今と違って景気も良く、就職状況も良かったため、日本中が浮かれていた頃でした。しかし彼女は遊び回ることなく、アルバイト等をこつこつ続け、ほんとうにこま

めに貯金をします。卒業が近づいた彼女は、自分の預金通帳を両親に見せ、どうしても海外留学がしたいと頭を下げて両親にお願いをしたのです。通帳を見た両親は驚きます。5000円単位のわずかな貯金がびっしりと刻まれた通帳が3冊、金額は何と100万円に達していました。恭子の家庭は、どこにでもある普通の家庭です。しかし、両親は、そこまで努力した娘の気持ちに打たれ、留学を許可し、可能な限りの援助をします。恭子は、スーツケースたった一つの荷物を持って、単身イギリスに旅立って行きました。

## ロイギリス留学

日本の大学の英文科を卒業したからといって、イギリスの大学の講義についていけるだけの英語力があるわけではありません。彼女は、まず、イギリスの地方大学に入学し、そこで1年間、英語を徹底的に学習します。普通なら、1年も留学すれば、その後は日本に戻ってくるものです。ところが、彼女はそれで満足せず、大学院を目指します。そして、翌年、彼女はなんとイギリスの名門、キングスカレッジの大学院に合格します。

外国の大学の厳しさは皆さんも聞いたことがあると思いますが、イギリスの名門大学院の厳しさは、想像を絶するすさまじいものがあつたようです。外国人だからといってハンディが与えられる訳ではありません。数千語におよぶレポート提出、発表、文献・論文の読破等で、徹夜は当たり前の日常です。それでも、厳しいばかりの生活ではありませんでした。

両親思いの彼女は、イギリス留学中の感動を両親に伝えるべく、「ブリティッシュ・ニュース」という自作の新聞を作り、月一回のペースで両親に送り続けています。私が読んだその新聞には、こんなエピソードが記されていました。

誕生日に目覚めると、ホストファミリーが自分のためにたくさんの花を準備しています。そしてケーキにはハッピーバースデー恭子の文字。感動しながら大学に行けば、教室の戸をくぐると同時にクラッカーに祝福の歓声、そしてハッピーバースデーの言葉。クラスメイトが待ちかまえていたのです。感動の涙の中、夜はクラスメイトがパーティーを開いてくれ、クラスメイト全員に加え、他のクラスの友人たち約30人、さらにホストファミリーを交えた大勢の中で祝福されたこと。様々な感動が、本当に生き生きと、この「ブリティッシュ・ニュース」に綴られています。

大学院の卒業式の時、恭子は教授から直接指名され、後輩たちにこう紹介されます。「皆、恭子が入学した頃を覚えているか？本当に英語の力がなかったが、今はこんなに立派になった。皆、この恭子の努力を見習うべきだ。」ホストファミリーや、同じ大学に通う日本人、外国人の友人と、多くの人に支えられ、彼女自身も多くの友人を支えながら、充実した、素晴らしい学生生活を送りました。

欧米の学校の年度は夏に終了しますが、日本の年度開始は春です。秋に帰国した恭子は、翌春までの半年、自宅で両親とゆっくり過ごしました。自分の進路をじっくりと考えるためであつたといいます。この期間のある日曜日、恭子は友人と、都城泉ヶ丘高校をこっそり訪問しています。彼女は、教室に入ると、「ああ、これが高校の臭いよ、高校の臭いがする！」と行って、懐かしそうに昔の自分の教室、自分の席に座つたといいます。

## ロイ外資系企業の会長秘書に

彼女は、自分の進路で悩みます。彼女は本当はイギリスに残りたかつたようです。しかし、最愛の娘を国外に置きたくはないという両親の思いも痛いほど分かります。そこで、両親思いの彼女は、自分の思いと両親の希望を両立させる方法として、イギリス最大規模の大手通信社BT（ブリティッシュ・テレコム）の日本支社を受験することにしました。彼女はTOEIC（トーイック）で900点以上のスコアです。（満点は990点）英検でいえば1級レベルですので外資系企業でも十分通用する英語力でした。特に、彼女はイギリス仕込みのクイーンズイングリッシュで、発音が美しかつたようです。また、彼女は英語のコミュニケーション力だけでなく、人柄が優れていました。面接でも、彼女の性格の良さ、人柄の素晴らしさは話すほどに相手にも伝わります。彼女は一次面接、二次面接、三次面接とクリアしていきます。大手企業は採用に至るまでに何回も面接があり、そのたびに面接官の役職が上がっていくのですが、最終面接はその通信社の会長が直々に行いました。彼女は会長にすっかり気に入られ採用決定、いきなり会長秘書という重要な役職に抜擢されます。

彼女は、仕事が楽しくてたまらなかつたようです。外資系企業の特徴ですが、仕事と休みのけじめがしっかりしており、休みは休みとしてたっぷり保証してくれます。さらに、会長は一般社員より早く会社から帰ってしまうため、秘書である彼女は残業も皆無でした。よく企業生活というとストレスだらけのハードな日常というイメージがありますが、全然そうではなかつたようです。当時、イギリスの首相はブレア首相でしたが、ブレア首相が来日した際のパーティーでは、通訳として活躍、多くの企業人のトップとともに写真に写っています。彼女は、本当に充実した日々を送り、その人柄が職場の人々からも愛されていました。

私が彼女の生き方に感動するのは、彼女が素晴らしい成果を出したからだけではありません。彼女は、どこにいても、具体的な夢を持ち、その達成のために努力をしたからです。東京の大学在学中には勉強をするだけでなく、海外留学を考え、貯金をします。イギリスの大学在学中には大学院を目指します。そして、企業入社後は、今後の人生のことを考えていたのです。

彼女は、企業人として会社で一生を送る気持ちはあ

りませんでした。家庭人だったお母さんの影響かもしれませんが、結婚したら、家庭で育児に専念し、子供のそばにいたいことを望んでいました。同時に、得意の英語を生かし、家庭と仕事を両立する道を模索していたのです。彼女は、結婚後は職場を引退し、英語力を生かし独立することを考え、企業に勤める傍ら、その対策を始めます。彼女は、会社の仕事の合間に、日本では数少ない同時通訳の専門家の所を訪れ、どうすれば同時通訳者として立ち立ちできるのか、具体的な話を直接聞きにいらしています。自分の今に甘んじることなく、常に新たな目標を掲げ、彼女は着実に歩み続けていました。

## □都城に帰る

平成10年(1998年)、そんな彼女が突然体の変調を訴えます。腰痛がひどく、どうもぎっくり腰だと思ったようです。しかし、どうも痛みが取れないので、会社の上司の勧めで専門医の検査を受けます。検査の結果は、癌でした。

都城から東京の病院に駆けつけた両親に主治医は告げます。進行性癌という難病で、通常の検査で発見することは不可能、進行をとどめることは出来ず、余命は長くても2~3ヶ月という厳しい現実でした。両親と、主治医は相談をし、本人には告知せず、故郷で、残された日々を送ることを選択します。主治医も賛成し、主治医は、本人には脊髄の炎症のため長期療養が必要だと説明しました。彼女はその言葉を信じ、会社に休暇を申請、都城の自宅に帰りました。

末期癌というと、やせこけ、苦しむイメージがありますが、あまりに進行の早い癌は、癌が進行しながらも他の臓器や体全体に活力が残っているためか、外見적으로는健康そのものでした。彼女の場合、腰の痛みはありながらも、発熱も咳もなく、食欲もあり、自宅で安静にしているため体重さえ増加したといえます。

彼女は、自分が癌であると、これっぽっちも疑っていませんでした。しかし、医学書等を調べ、脊髄炎という病気について調べます。そして、自分の病気が長期に渡ること、最悪の場合は車椅子等の生活を余儀なくされる可能性もあることを知り、最悪の場合を想定し、ここでも心の準備を始めていたのです。

「お母さん、入院したら、私は病気で入院してる子供たちに英語を教える！」ある時、彼女は母親に、自分の様々な計画を詳細に話します。彼女は、病院内に英語教室を開設する計画を考えたのでした。このように、彼女は、どんな状況に陥っても、常に前向きで、そして必ずそれを成し遂げてきました。深刻な病気だと告げられても、彼女の生き方は変わりませんでした。常に彼女の計画を支えてきた両親も、今回はただ頷くだけでした。

自宅で2週間療養後、彼女は当時の宮崎医科大学に入院することになります。道中、山桜が満開でしたが、ソメイヨシノはまだつぼみの状態でした。桜を見つけ

たお父さんは思わず声をかけます。

「恭子、見てごらん！桜だ、ほら、あんなに桜がきれいだよ。」

「お父さん、次に桜を見るのはいつになるかな。来年の今頃、私はどうしているだろう…」

「そりゃ、元気になって、もう会社に帰っているよ。」

「そう、元気になったら、またイギリスに行きたいな。」

恭子にとって最後の桜だと知りながら、父は笑顔で嘘をつきとおしました。入院後も、母親と一緒に車椅子で病院内を散歩をするほど元気だったとそうです。

別れは突然でした。末期癌特有の苦痛や、人工呼吸等の長期療養がなかったのは、神の最後の慈悲だったのでしょう。大好きなCDの曲を聴きながら、満開の桜の中、彼女は両親や友人に見守られながら旅立っていきました。享年26歳、癌発見からわずか一月足らず、運命というにはあまりに早すぎる別れでした。

私は恭子の死を、恭子の葬儀の後に知りました。当時、私は、この宮崎西高校に勤務していました。ご両親が落ち着かれた頃、私は恭子の自宅を訪問し、ご両親から生前の恭子の話をお聞きしました。「娘は、短い間でしたが、本当に人の何倍も充実した人生を送りました。娘の人生は本当に輝いていました。」このご両親の言葉を忘れられません。恭子の書いたイギリス通信もご両親よりいただきました。たまらない悲しさの中、私は恭子の生き方を何らかの形で残したく、そのときの学級通信として恭子の生き方を記しました。そして、その時々を生徒に語ってきました。

今も、恭子の姿は私の中に生きています。ひたむきに生きた恭子、愚直だった恭子、誰よりも清掃に熱心に取り組んだ恭子。部活と勉強に頑張った恭子、前向きだった恭子。そして、花火のように輝いて消えていった恭子。

今、私は生徒諸君に様々な生き方を語ります。そのとき、いつも恭子のことを思い出しています。彼女の生は短い間でしたが、本当に輝いていました。そして、輝いた魂は、消えません。今でも、私を励ましてくれています。

さようなら、恭子。別れる前に、せめて一目会いたかった。私には何もできなかったが、君のすばらしい人生を、私の生徒たちに伝える勝手を許して欲しい。君のような人がいたことをどうしても伝えたい。

さようなら、恭子。君のような生徒を担当できて私は幸せだった。君のことは一生忘れないよ。君のことをご両親は自慢していたよ。「娘は、短い間でしたが、本当に人の何倍も充実した人生を送りました。娘の人生は本当に輝いていました。」このご両親の言葉を僕は忘れない。

さようなら、恭子。もう、泣くのはやめるよ。神を恨むのもやめる。天国はきっと桜が満開だろう。君に教えてもらった様々なことを大切に、生きていこう。さようなら、恭子。

